

第2章 調査対象地域

第1節 佐世保市の概要

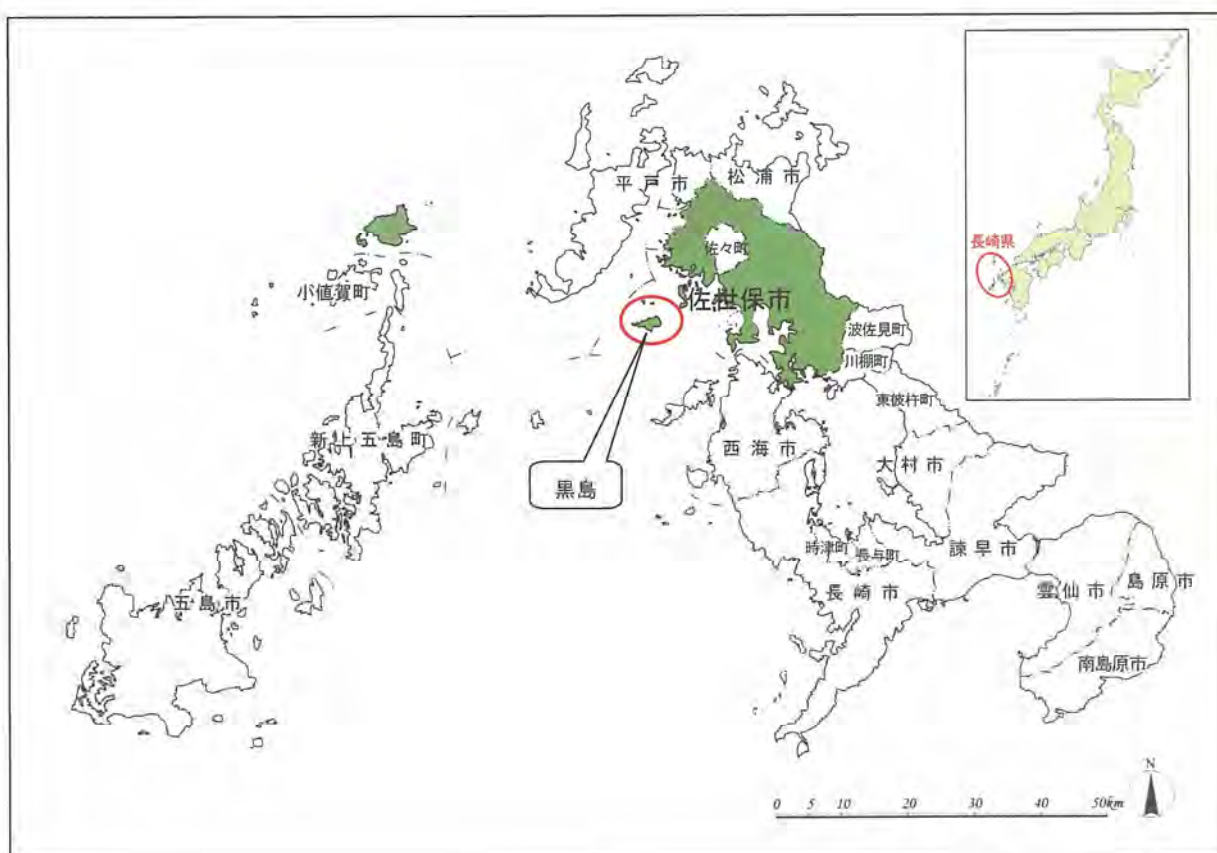
第1項 位置及び地形、地質

長崎県佐世保市は、九州の西北地域にあり、本土最西端に位置する都市である(第2図)。明治35年(1902)に佐世保村から一足飛びに佐世保市となり、以後合併を繰り返して市域面積は426.35km²、人口は264,440人(H22.4.1現在)の規模を持つ長崎県第2位の都市となった。

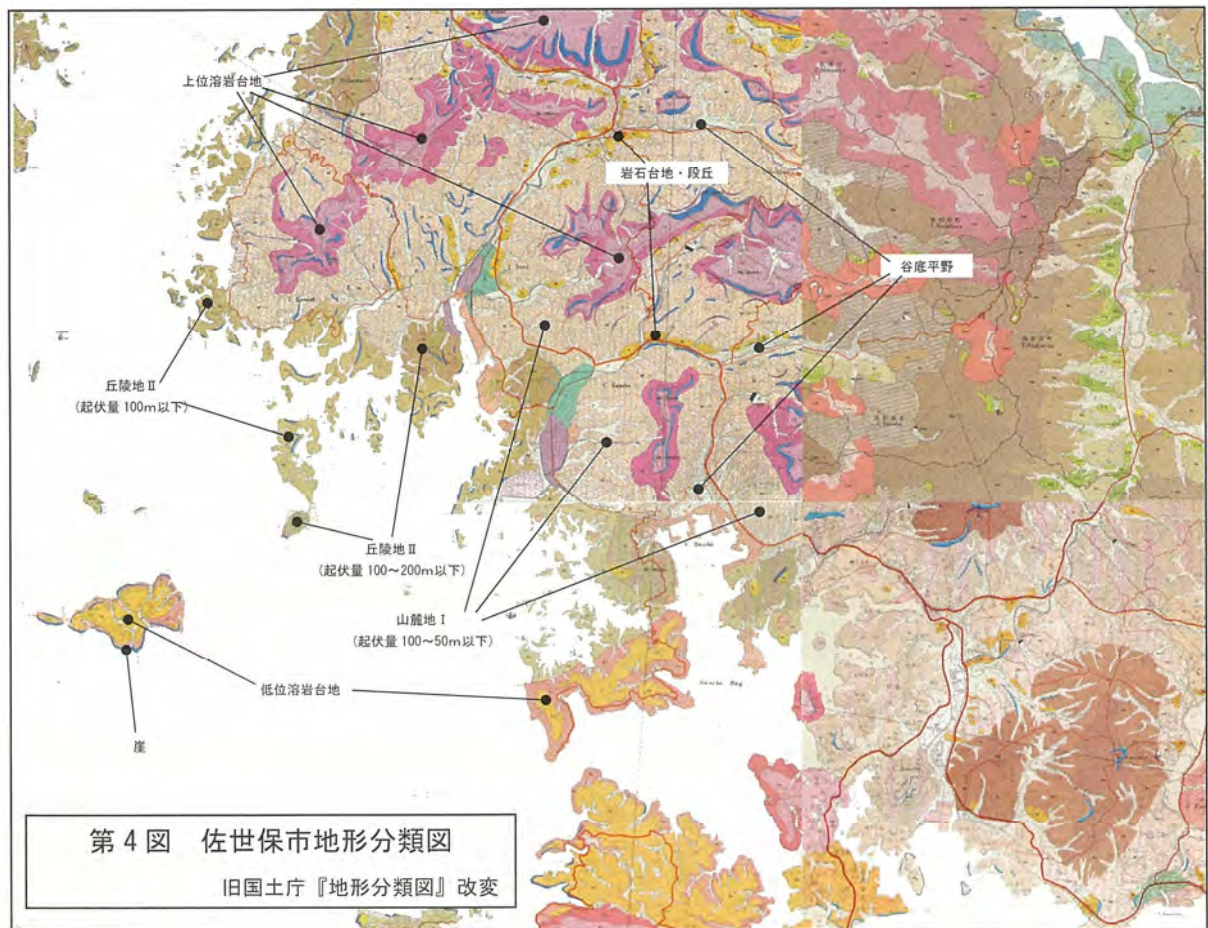
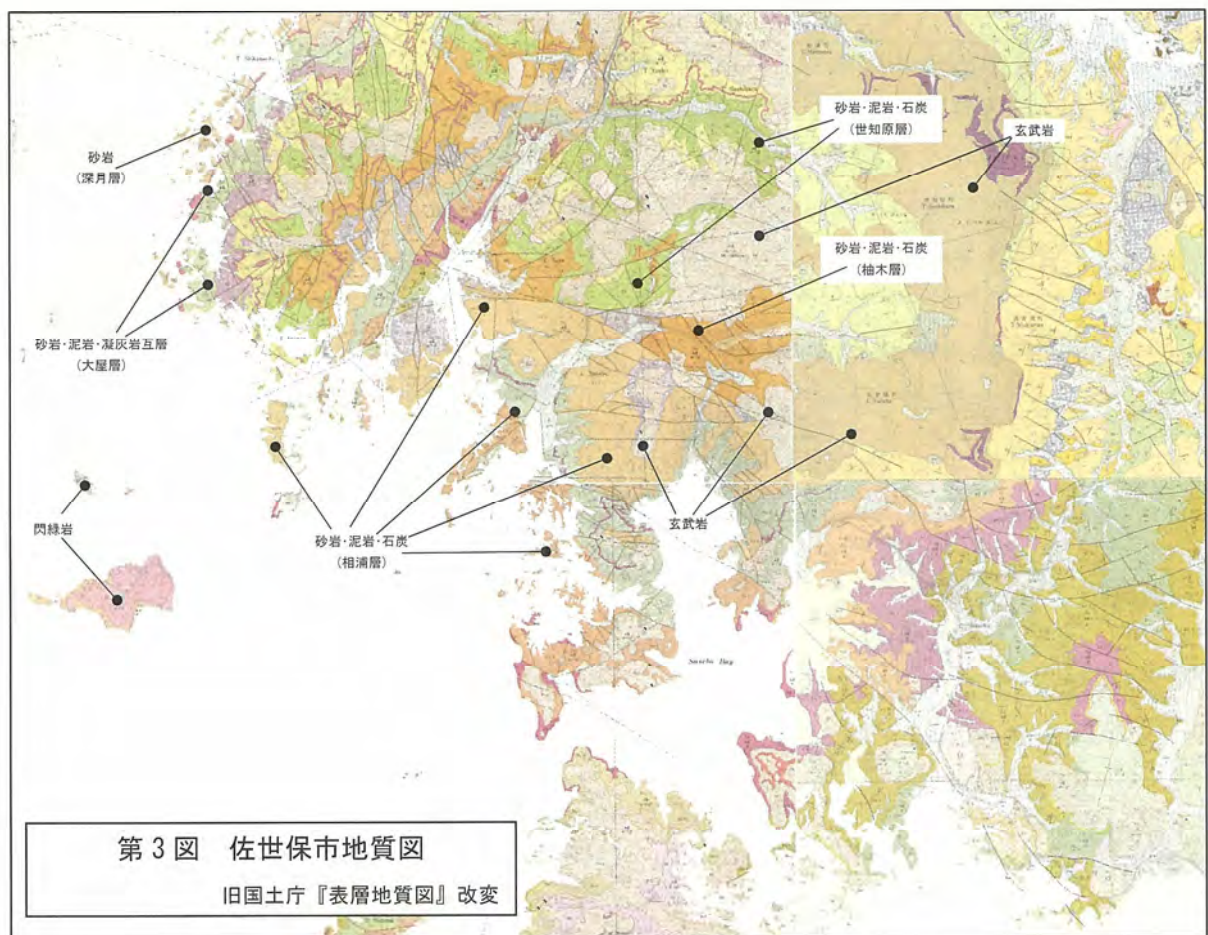
市域は北松浦半島の付け根から中南部を占めており、国見山(標高776m)を主峰とする国見山系をはじめとする主に山地、丘陵からなり、佐世保市中心市街地も烏帽子岳(標高568m)、弓張岳(標高364m)、石盛岳(標高465m)といった山々に囲まれた侵食谷底に立地している。海岸には沖積平野が少なく、南、西部では典型的なリアス式海岸を形成している。

水系は国見山系を源流とする佐々川、相浦川の2河川を中心として、佐世保川、日宇川、小森川、宮村川などがあり、それぞれ下流域を中心とした地域には古くから人の生活が営まれてきた。特に市北部を流れる佐々川と相浦川によって形成された佐々谷、相浦谷では、段丘崖や段丘面に多くの洞穴遺跡や開地遺跡が確認されている。

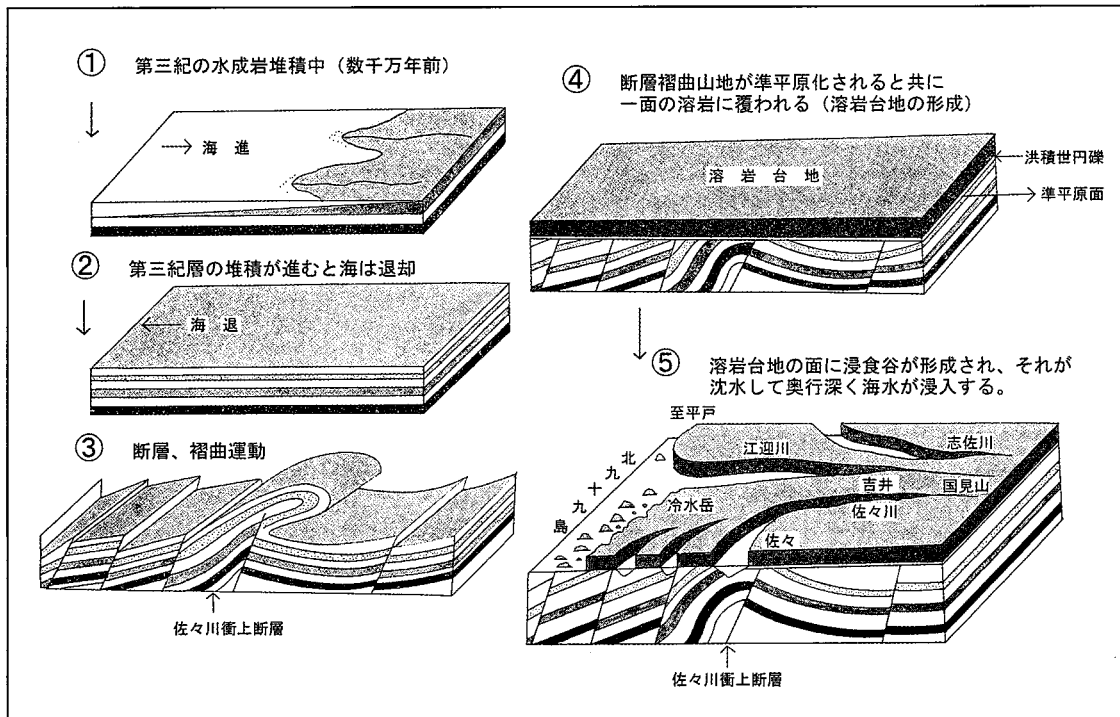
佐世保市が位置する北松浦半島の地質は、その下部の大部分が古第三紀・新第三紀層に属する砂岩や頁岩といった堆積岩から成る。その上に火山活動による新第三紀の北松浦玄武岩の溶岩が被っている。その溶岩が降水や河川によって侵食され、谷や平地、丘陵が形成され、現在に至った。この地質図を第3図に、地形分類図を第4図に示した。そして地形の形成過程を第5図に示した。



第2図 佐世保市と黒島の位置



なお、北松浦半島の基盤となっている古第三紀・新第三紀層は下より杵島層群、佐世保層群、野島層群に分類できるが、佐世保市域のほとんどを占めている層が佐世保層群である。この地層は白色砂岩を主体とし、松浦三尺層、大瀬五尺層などの石炭層を多数含んでいる。したがって明治時代から昭和40年代まで北松浦半島各地に炭坑が操業しており、「北松炭田」あるいは「佐世保炭田」と呼ばれていた。



第5図 北松浦半島の地形発達過程

吉富一『佐世保及近郊地形誌』改変

第2項 気象、植生

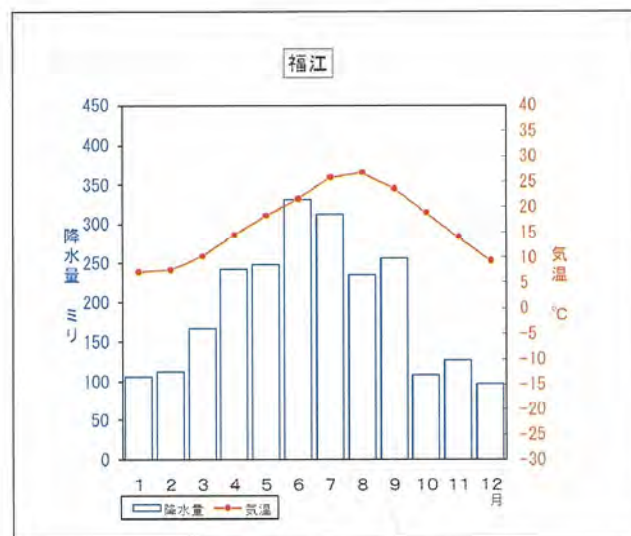
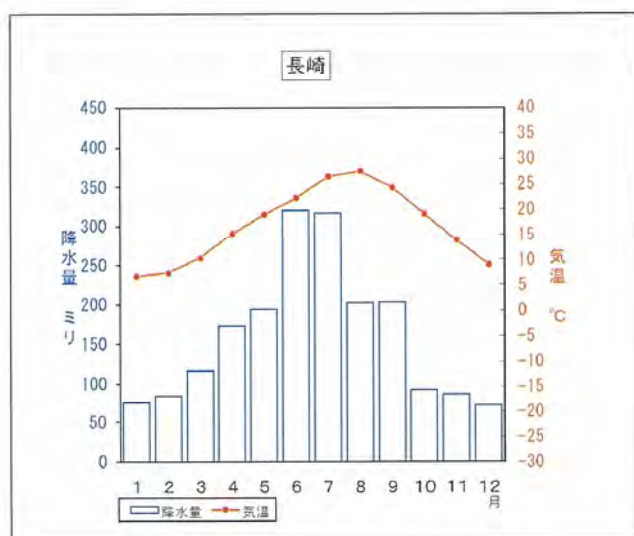
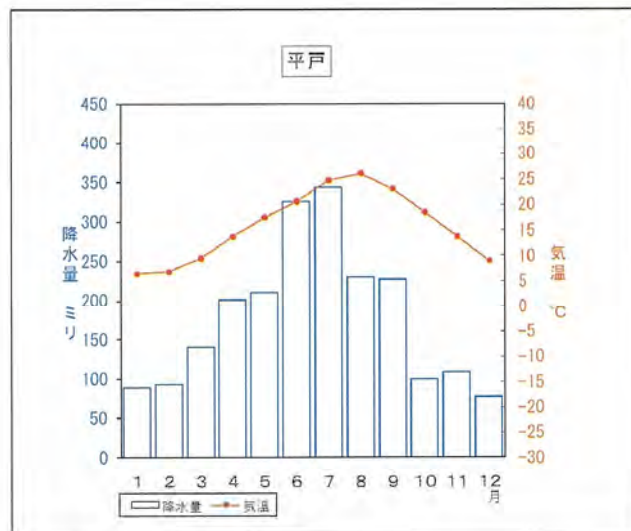
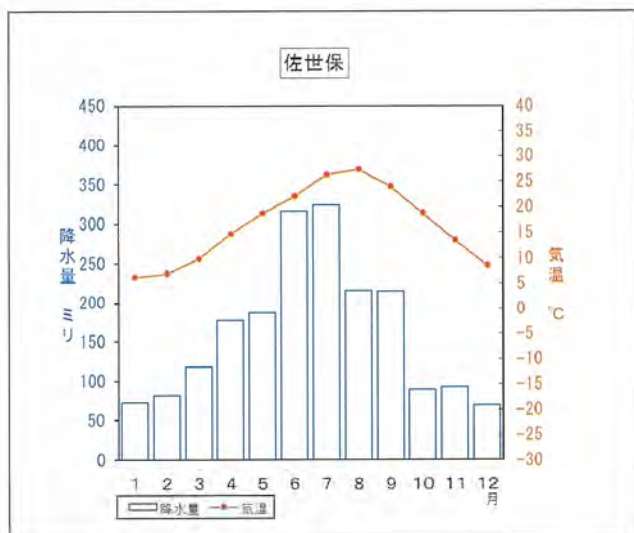
(1) 気象概況

佐世保市がある九州・沖縄地域の気候は大まかな分類ではアジアモンスーン気候区に属しており、さらに日本全体を対象とした気候分類では九州型、瀬戸内海型、南海型の3つに分類されている。このうち九州型はさらに7つの類型、すなわち日本海型気候区、瀬戸内海型気候区、西海型気候区、内陸型気候区、南海型気候区、山地型気候区、亜熱帯気候区に分類される。佐世保市が属する長崎県はこのうち西海型気候区に該当している。

西海型気候区の特徴は一般的に、「年平均気温が16～17℃、年降水量2000mm前後、1月の平均気温は6℃以下で、冬季は暖かく、夏は比較的涼しい」とされている。第6図に佐世保市、平戸市、長崎市、五島市における昭和22年(1947)から平成20年(2008)まで(ただし五島市については1963～2008年)の観測結果に基づく雨温図を示した。

これらの雨温図には、上記の西海型気候区の特徴が良く現われているが、最寒月気温に関しては若干高く、外洋に近づくに従って高くなる傾向にある。これは九州西北沖を流れる対馬暖流の影響によるものと考えられる。

次に風況についてであるが、季節風の影響を非常に受けやすく、概ね冬の北西風、夏の南東風が強い。さらに夏は台風の影響を受けることが多く、特に台風が対馬海峡付近を通過した場合は猛烈な南風が吹き荒れる。



都市名	佐世保												1947~2008
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平均気温℃	6.2	6.9	9.9	14.8	18.8	22.2	26.4	27.4	24.1	18.9	13.6	8.6	16.5 年平均気温℃
降水量ミリ	72.9	81.8	118.4	177.5	187.2	315.8	323.7	215.1	214.3	89.8	91.7	69.9	1958.0 年間総降水量ミリ

都市名	平戸												1947~2009
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平均気温℃	6.6	7.0	9.6	13.8	17.6	20.8	24.9	26.2	23.2	18.6	13.8	9.1	15.9 年平均気温℃
降水量ミリ	89.9	92.5	140.9	201.8	211.3	325.6	344.2	229.8	227.6	99.6	108.5	77.6	2149.5 年間総降水量ミリ

都市名	長崎												1947~2009
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平均気温℃	6.7	7.3	10.3	15.1	19.0	22.3	26.5	27.6	24.4	19.1	13.9	9.0	16.8 年平均気温℃
降水量ミリ	75.7	84.4	116.8	172.7	194.5	320.2	316.7	202.1	203.0	92.4	86.9	72.0	1937.4 年間総降水量ミリ

都市名	福江												1963~2008
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平均気温℃	7.2	7.6	10.3	14.6	18.3	21.7	25.9	26.8	23.7	18.9	14.1	9.4	16.5 年平均気温℃
降水量ミリ	106.0	112.5	167.4	242.0	248.8	331.6	313.2	235.1	256.1	109.0	127.3	97.3	2346.2 年間総降水量ミリ

第 6 図 佐世保市、平戸市、長崎市、五島市の雨温図

気象庁ホームページより

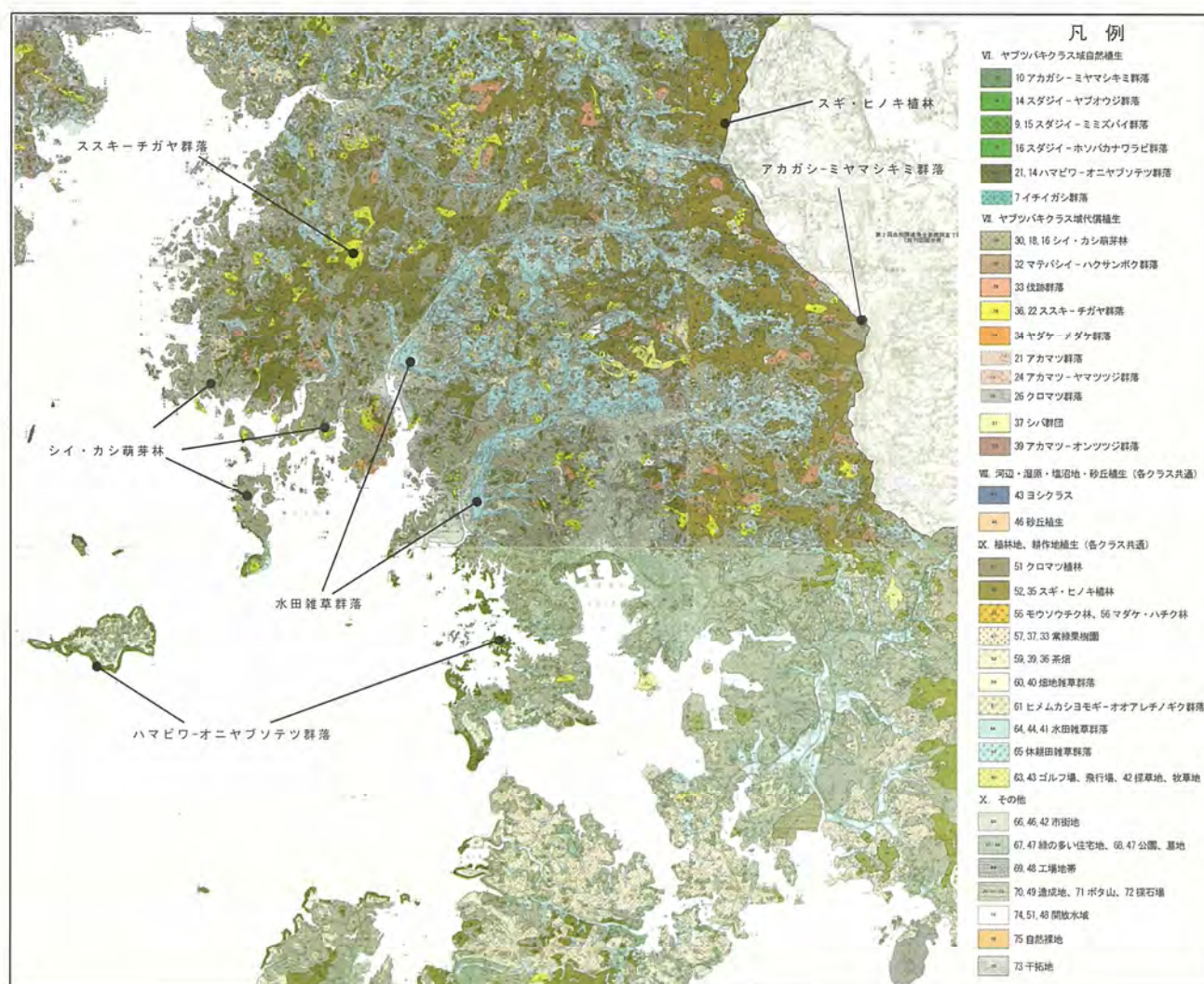
(2) 植生の概況

佐世保市は最も高い国見山でもその標高は 776m であり、全て低地帯に属している。したがって温帯性の植物は極めて少ない。しかし上記に述べた冬季に暖かく、夏季に比較的涼しいという西海型気候区にあり、さらに対馬暖流の影響を受けていることから、特に海岸部において南日本系や南方系の植物が多いという特徴がある。

佐世保市全域の植生を見渡した状況として、標高 200～300m より高いところにはスギ・ヒノキなどの人工林が分布し、それより低い丘陵地や急傾斜地にはシイ・カシなどの二次萌芽林が分布している。極相林は極端に少なく、神社の社叢や国見山の一部に見られる程度である。そして川沿いの低地を中心に水田雑草群落や分布しているため、あたかもモザイク画を見るような植生分布となっている(第7図)。

このような現存植生となった経緯であるが、本来佐世保市を含む九州北西部はシイ・カシ類が優勢となる照葉樹林帯であり、江戸時代から戦後にかけて薪炭として盛んに伐採が行われてきた。しかし電気、ガスの普及により薪炭の需要は減ったため薪炭林は放置され、原植生であるシイ・カシ類の二次萌芽林が繁茂する状況となった。

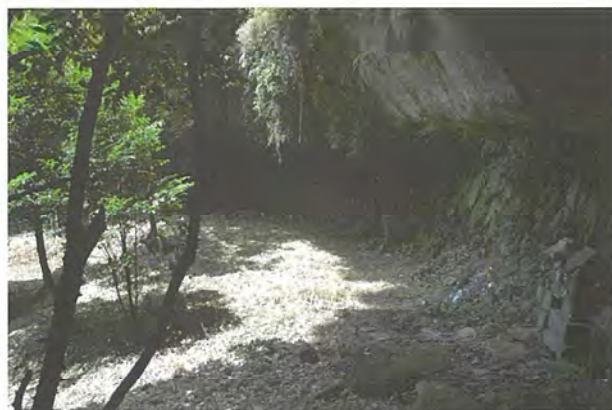
さらに 1950 年代～70 年代にかけての住宅建設ラッシュに伴う官民挙げての拡大造林により山地を中心にスギ・ヒノキの人工林が拡大し、現在の状況が形成されている。



第7図 佐世保市の現存植生図 旧環境庁『現存植生図』改変

第3項 歴史

佐世保地域における人類活動の黎明は、約 42,000 年前まで遡ることができる。この頃の遺跡として、佐世保市北部の吉井町にある直谷稲荷神社岩陰や、福井洞窟(国史跡)がある。これらの遺跡では旧石器時代から縄文時代にかけて連続した人の営みが確認されており、佐世保地域のみならず、わが国における人類活動の黎明期を物語る遺跡として重要である。また旧石器時代から縄文時代への過渡期の遺跡が多いことも大きな特徴であり、福井洞窟や泉福寺洞窟(瀬戸越1丁目：国史跡)では列島最古級の土器である「豆粒文土器」や「隆起線文土器」(いずれも約 12,000 年前)が出土しているなど、世界的にも独特な縄文時代の幕開けを物語る遺跡として注目されている。



佐世保を代表する洞穴遺跡

左上より時計回りに福井洞窟(国史跡：吉井町)、直谷稲荷神社岩陰(吉井町)、
岩下洞穴(県史跡：松瀬町)、泉福寺洞窟(国史跡：瀬戸越1丁目)

このほかにも、縄文時代のハンターたちの拠点となった岩下洞穴(松瀬町：県史跡)や弥生時代の集落や墓地である四反田遺跡(下本山町)、門前遺跡(愛宕町、中里町)、南洋から日本列島を縦断する交易ルートが存在を示唆する宮の本遺跡(高島町)など、縄文時代から弥生時代にかけての重要遺跡が多く確認されている。

しかし、古墳時代以降の遺跡は極端に少なく、数基の小円墳や経塚が確認されているに過ぎない。

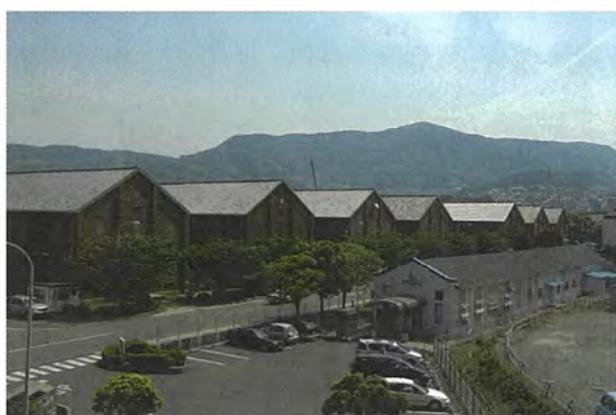


発掘調査中の門前遺跡

戦国時代には平戸松浦氏、宗家松浦氏、大村氏などによる攻防が繰り返され、最終的には平戸松浦氏の領地として江戸時代を迎え、佐世保地域は平戸藩の一部となった。

江戸時代を通じて佐世保地域は平戸藩の一村に過ぎなかったが、明治 19 年(1886)に天然の良港である佐世保湾に注目した海軍によって軍港と鎮守府の設置が決定してからは、県北地域の中心都市として発展することとなった。そして日清戦争、日露戦争では連合艦隊の根拠地として日本の戦勝に貢献し、「軍都佐世保」の名は全国に知れ渡った。その間の明治 35 年(1902)には佐世保村から一足飛びに佐世保市となったが、これは佐世保がいかに急速に発展したかを物語っている。

その後も佐世保は海軍の重要な基地として発展を続け、周辺の町村を編入して市域も拡大を続けた。しかし、太平洋戦争末期には海軍基地であったがゆえにアメリカ軍の空襲を受け、市街地の 2/3 が焼失し、1,200 人以上が犠牲となった。



佐世保市内に残る近代化遺産(旧海軍により建設されたもの)

左：旧軍需部倉庫群(平瀬町、米海軍佐世保基地内) 右：旧海軍工廠 250 t 起重機(立神町、佐世保重工業(株)佐世保造船所内)

戦後、海軍の解体に伴い存在意義を失った佐世保からは人口の流出が続き、終戦前は約 300,000 人だった人口も昭和 20 年(1945)末には半分以下の約 140,000 人まで激減してしまった。

ところが、昭和 25 年(1950)に朝鮮戦争が勃発すると、佐世保には国連軍の基地のほか、新たに発足した海上自衛隊の基地や在日米軍の基地が置かれ、それら基地などからの軍需物資、生活物資などの発注が大量に発生し、「特需景気」と呼ばれる空前の好景気となり佐世保は息を吹き返すことになった。

現在は基地の街であることに加え、造船業や豊かな自然、歴史的環境を活かした観光による市の発展を目指している。



米海軍佐世保基地

第4項 文化財

前項で述べたように、佐世保市は独特な地形の成り立ちと豊かな自然に恵まれ、40,000年以上の昔から現在まで、連綿と人の生活が営まれてきた。その過程において、多数の自然遺産や有形無形の文化遺産が形成されている。これらの自然、文化遺産はその重要性に応じて文化財に指定されている。

種類 指定	有形文化財			記念物		無形文化財	有形民俗文化財	無形民俗文化財		天然記念物		計
	建造物	美術工芸品	考古資料	史跡	名勝	工芸技術	信仰	芸能	祭り	植物	地質鉱物	
国指定	1	0	1	3	0	0	0	0	0	1	0	6
国登録	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
国選択	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
県指定	3	2	0	6	0	2	0	1	1	8	3	26
市指定	9	16	3	25	1	4	18	8	4	23	4	115
小計	24	18	4	34	1	6	18	9	7	32	7	160
種類別計	46			35		6	18	16		39		

※佐世保市亜熱帯動植物園で飼育中のコウノトリ(国特別天然記念物)、ツシマヤマメコ(国天然記念物)は含まず。

埋蔵文化財包蔵地(指定文化財も含む)	492
近代化遺産(指定文化財を除く)	279

人類が生活した痕跡である埋蔵文化財包蔵地、つまり「遺跡」は492カ所確認されている。このうち地形の成立過程と大きく関係している洞穴遺跡は31カ所確認されており、全国でも屈指の洞穴遺跡集中域として知られている。

また、近代における佐世保は、海軍鎮守府と軍港の設置により急速に発展した歴史を持っていることから、主に海軍に由来する近代化遺産が279件確認されている。これは県内他市町と比べても圧倒的に多く、近代における佐世保市の発展を物語るものとして重要である。



国重要文化財「黒島天主堂」(黒島町)



県無形民俗文化財「木場浮立」(上木場町)



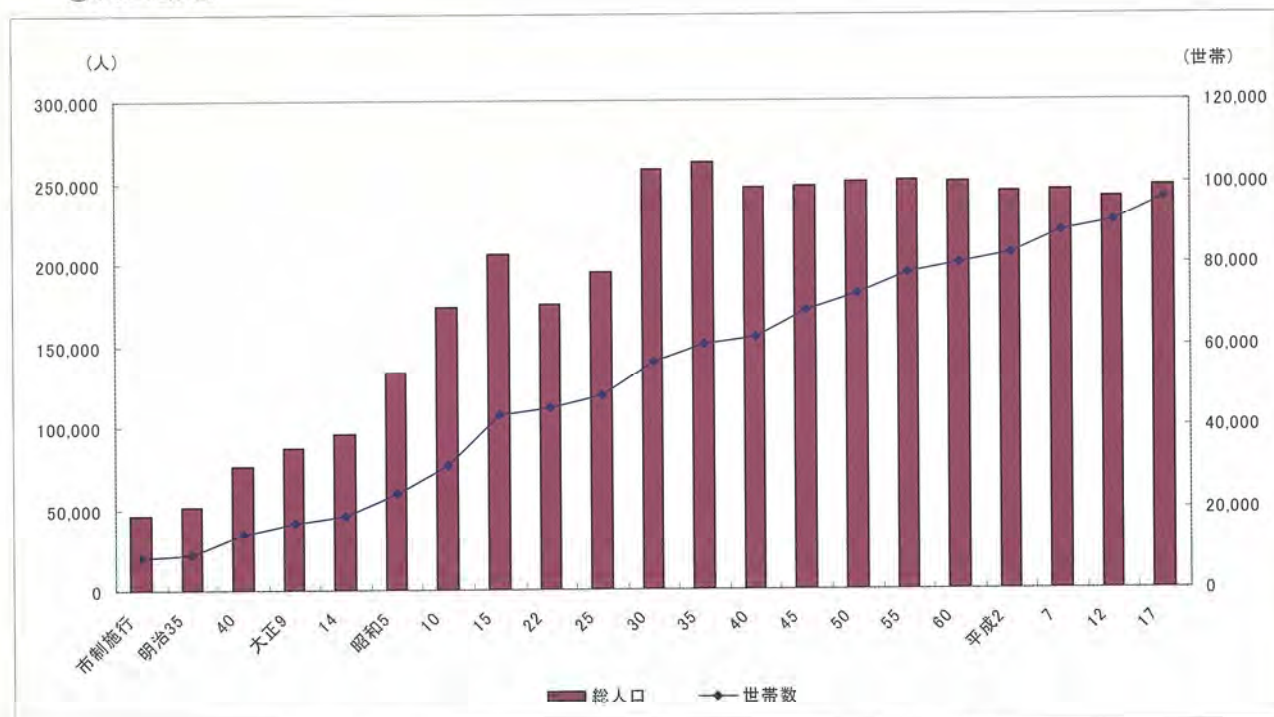
国登録有形文化財「市民文化ホール(旧海軍佐世保鎮守府凱旋記念館)」(平瀬町)



市無形文化財「献上唐子焼」
(平戸松山窯：三川内本町)

第5項 人口動態及び産業

①人口動態



第8図 佐世保市における総人口、総世帯数の推移

第19回佐世保市統計書(平成19年度版)より

第8図は佐世保市における総人口、総世帯数の推移を表したものである。明治維新直後、佐世保の人口は約3,000人であった。しかし、明治19年(1886)に軍港と海軍鎮守府の設置が決定してから急速に人口が増加し、市制が施行された明治35年(1902)末には50,000人を突破する勢いであった。その後も人口は増加の一途をたどり、第8図には表れていないが終戦直前には300,000人を超えていた。しかし終戦によって海軍という大きな柱を失った佐世保からは人口の流出が続き、昭和20年(1945)末には約140,000人にまで落ち込んでいる。

その後は朝鮮戦争による特需やそれに伴う米軍基地の強化、新たに発足した海上自衛隊基地の誘致、旧海軍工廠の施設を受け継いだ造船業の活況により盛り返し、昭和34年(1959)には265,781人と戦後最多となった。それ以降小幅な増減を繰り返して現在に至っている。

なお戸数については増加の一途をたどっており、核家族化の進行をよく表している。

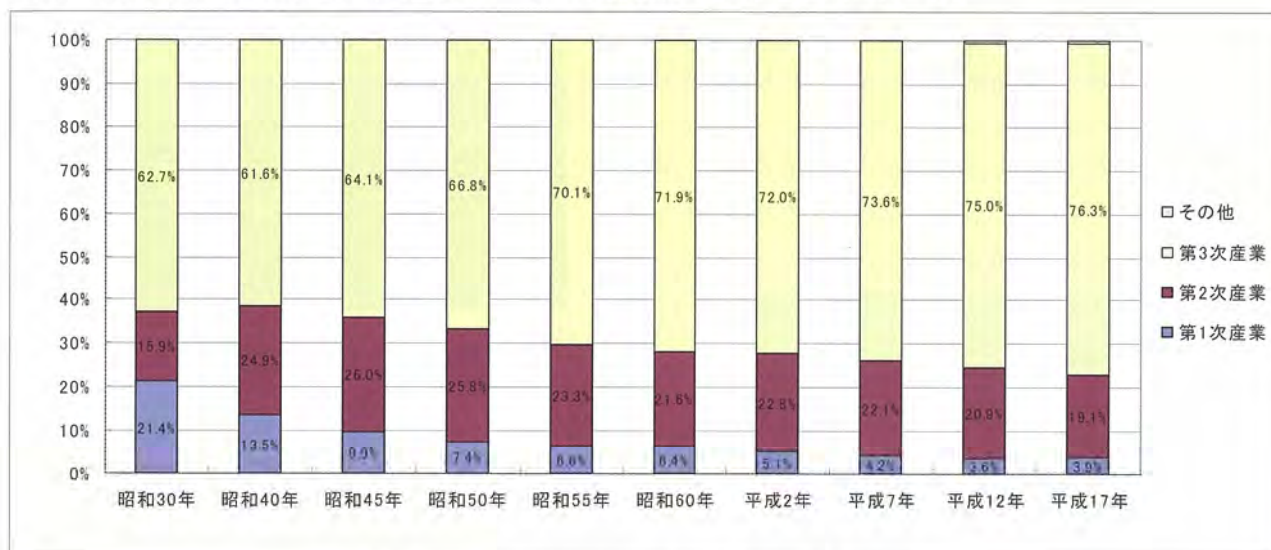
②就業者数と産業構造

本市の就業者総数は、従来より微増減を繰り返して来ているが、最近では合併効果もあり微増している状況である。昭和50年(1975)には111,864人だったが、平成17年(2005)は113,355人と1.3%の微増であり、ほぼ横這い状況と言える。平成17年(2005)の就業者のうち、高齢者は9,112人であり、高齢化率は8.0%である。

産業別就業者割合をみると、昭和30年代から一貫して第1次、第2次産業よりも第3次産業の就業者数が多いという特徴がある。これは谷あいには立地し、優良な農地や漁港が少ない佐世保市に特徴的な傾向といえるだろう。

平成17年度における産業別就業者の割合は、第1次産業では農業(3,516人、就業者総数

に占める割合は 3.1%)と漁業(862 人、就業者総数に占める割合は 0.8%)が多くを占めているが、全体から見ると少数である。第 2 次産業では建設業(11,253 人、9.9%)と製造業(10,373 人、9.2%)が主である。第 3 次産業では、卸売・小売業(23,095 人、20.1%)、医療・福祉(12,911 人、11.4%)が主であるが、他にサービス業関係が多くを占めている。

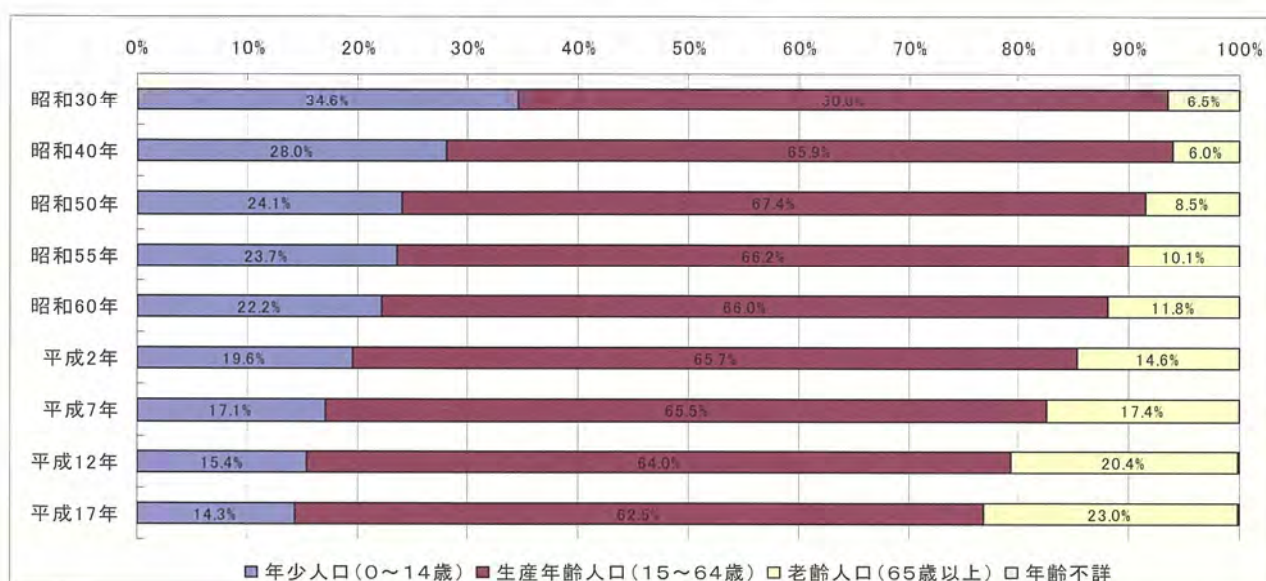


第 9 図 佐世保市における就業者別人口の推移

第 19 回佐世保市統計書(平成 19 年度版)より

近年の傾向としては第 1 次、第 2 次産業とも就業者数が減少傾向にあり、第 3 次産業は増加傾向にある。この傾向は全国的にも同様であるが、特に第 1 次産業の衰退が著しいこともあり、この傾向はさらに加速するものと考えられる。

なお第 10 図に表れているように、就業者の高齢化は今後深刻な問題である。特に農業就業者に顕著に表れており、高齢者数は 1,882 人で高齢化率は 53.5%と半数以上が高齢者である。漁業就業者では高齢者数 160 人、高齢化率は 18.6%とそれほど高くはないが、50 才～64 才が 305 人おり、今後高齢化が急速に進展すると推測される。



第 10 図 佐世保市における年齢区分別人口構成比の推移

第 19 回佐世保市統計書(平成 19 年度版)より

第2節 調査対象地域の概要

第1項 九十九島の概要

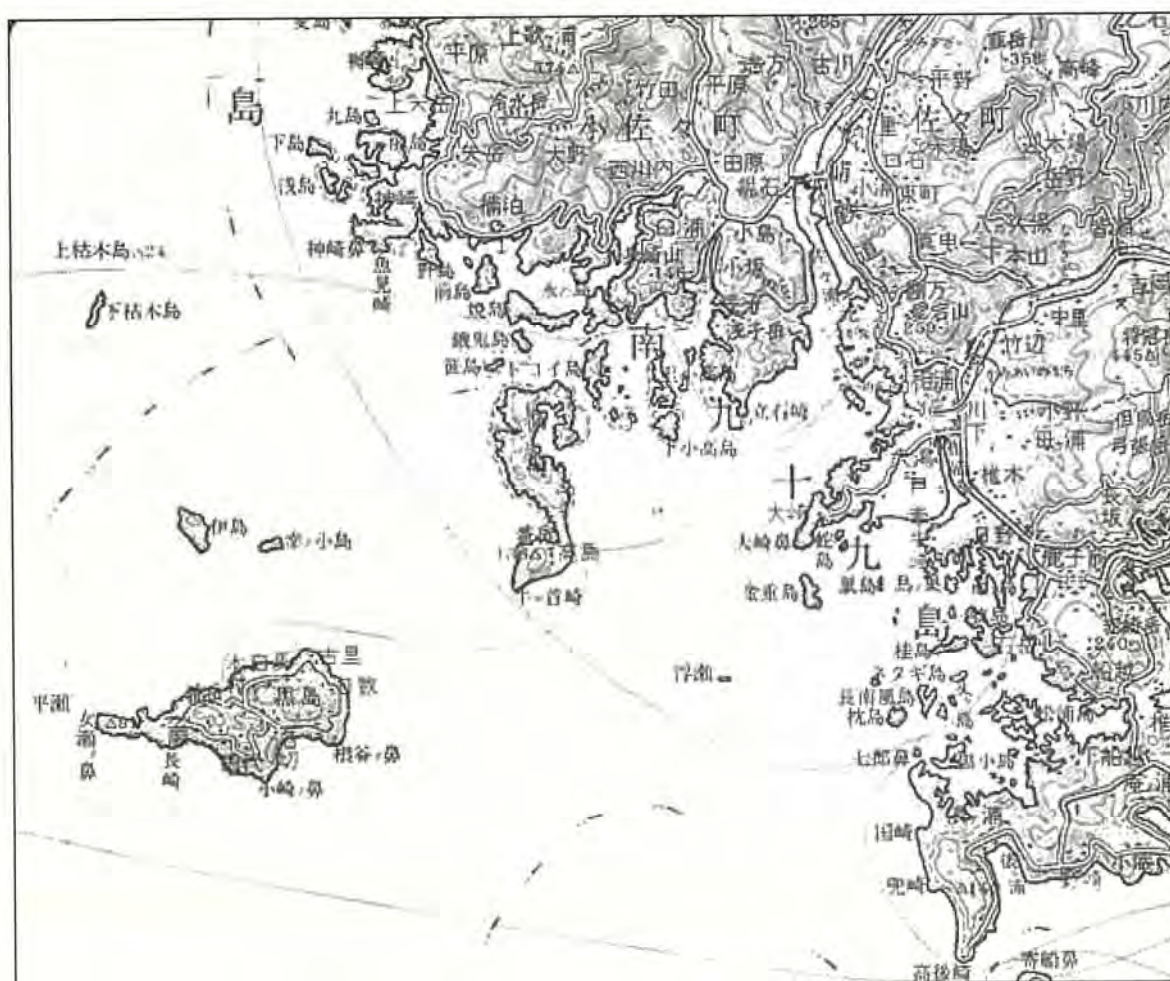
本調査の対象地域は第1章第2節第1項で述べたとおり、黒島・高島・伊島・幸ノ小島とその周辺海域としたが、この4島はいずれも九十九島に含まれている。したがって、ここでは九十九島の概要について述べることにする。

九十九島は、北松浦半島の西側沿岸に広がる多島海の通称である。名称の由来はその景観のとおり「無数の島が浮かんでいる」ことによる。行政区としては佐世保市及び平戸市に属しており、島々の配列状態、個々の島の規模や地質などの違いから佐々川河口によって「北九十九島」と「南九十九島」に分けることができる。

平成14年(2002)に「九十九島の数調査研究会」が確認したところによると208の島が存在しており、そのうち204島が無人島である。有人島は黒島、高島、前島、蓼泊(とうどまり)島の4島であり、前島、蓼泊島は沿岸に極めて近く橋梁により本土と連結されている。



倭ヶ浦半島より望む九十九島



第11図 九十九島の地形

第2項 九十九島の地形、地質

208 の島々から構成されている九十九島諸島と沿岸部は、長崎県内で最も典型的なリアス式沈降海岸といえる。九十九島諸島の地質はそのほとんどが古第三紀・新第三紀層が露出したものであり、本土の山頂部を覆っている玄武岩はわずかししか見られない。古第三紀・新第三紀層は下位より杵島層群、佐世保層群、野島層群に分類される。そして杵島層群は下からみかえり橋層、黒石層、古川層に、佐世保層群は下から相浦層、中里層、柚木層、世知原層、福井層、加勢層に、野島層群は下から大屋層、深月層にそれぞれ細分される。この地質柱状模式図を第12図に、地質図を第13図に示す。

(1) 北九十九島

北九十九島を構成している野島層群は層厚が2,000mにも達する地層であり、本土最西端である小佐々町神崎鼻を境とし、北西側には深月層が、南東側には大屋層が分布している。つまり、地層は北西に向かって緩やかに傾斜していることになる。

大屋層は砂岩、泥岩、凝灰岩の互層が発達しており、顕著な化石層を数枚含んでいる。特に小佐々町楠泊西方にある野島には淡水性の貝類化石層の露頭が確認されており、「小佐々野島の淡水貝化石含有層」として長崎県の天然記念物に指定されるとともに、野島層群の名の由来ともなっている。



小佐々野島の淡水貝化石含有層

『長崎県の文化財』より

深月層は基底部に角礫凝灰岩、中上部に砂岩、泥岩の互層から成る。部分的に炭質頁岩や植物化石層を含んでいる。

地形の特徴として、なだらかな斜面と厚い表土があげられる。海岸部には波食台は少なく砂浜や干潟が多い。したがって動植物相は北九十九島の方が豊かである。

(2) 南九十九島

南九十九島を構成している相浦層は、佐世保層群の最下部にあたる地層で、白色砂岩を主体とし、上部に頁岩が発達するという特徴がある。ちなみに南九十九島だけではなく、佐世保市周辺の台地や山地も相浦層により構成されている。

地形の特徴として、島は凸型で砂岩の急な崖地が多く、島の周辺に波食台が発達しているところが多い。そのため、なだらかな渚や砂浜は少ない。

(3) 九十九島の成り立ち

このような地質で構成されている南北九十九島諸島であるが、その成立過程は古第三紀・新第三紀層が侵食されて広大な小起伏面が生まれ、その後の海進によって侵食に強い高い部分のみが海面上に島として残るようになったものである。

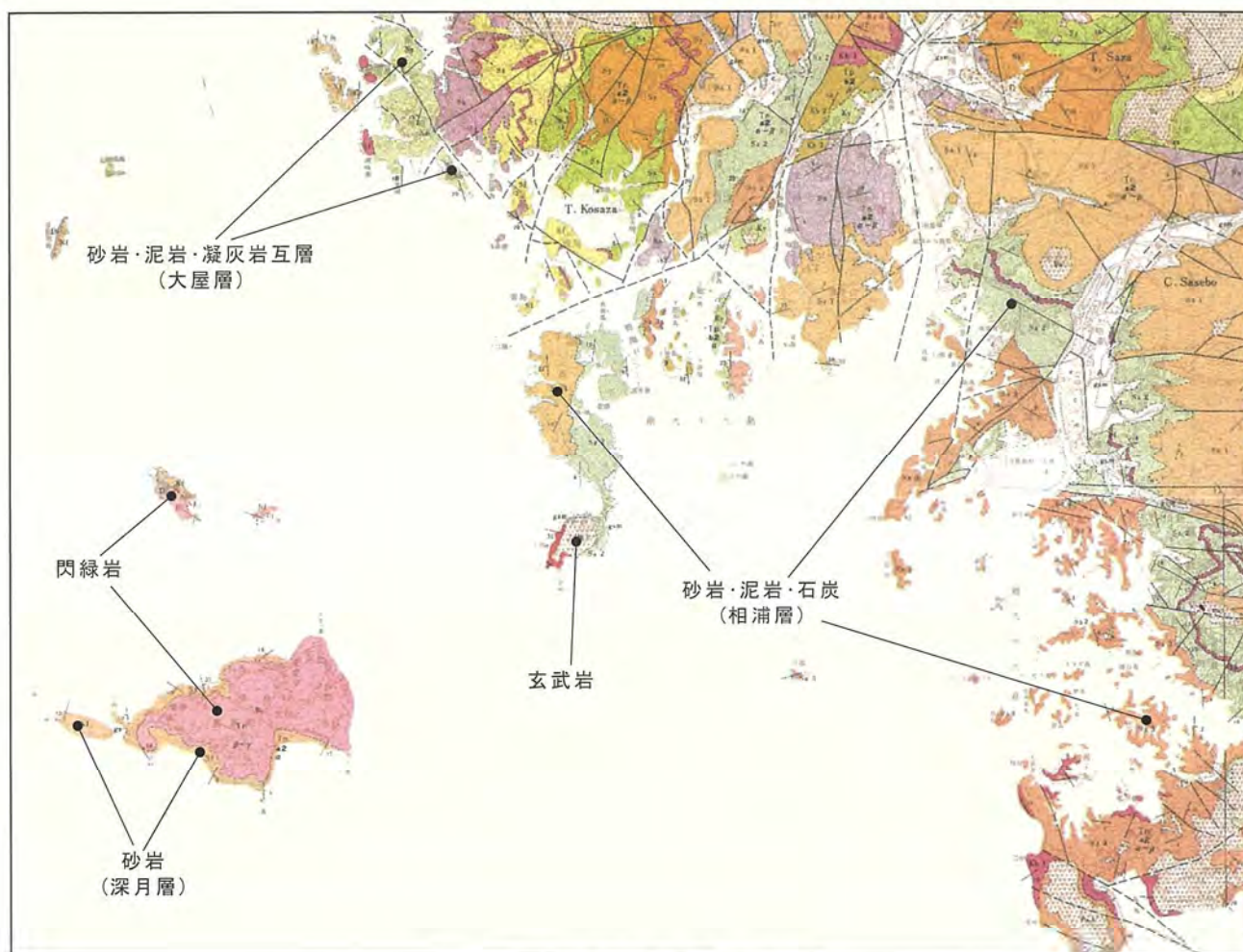
そして、特に南九十九島の島々の多くには、満潮時でも海面上に頭を出している「波食台」と呼ばれる侵食地形が存在している。これは、約 7,000 年前の縄文時代前期にピークを迎える一時的な温暖化による海面の上昇、いわゆる「縄文海進」とその後の海面低下期に形成されたものと考えられている。したがって、現在見ることのできる九十九島の景観は、約 7,000 年前以後に出現した非常に新しい地形といえることができる。



島々に見られる波食台

野島層群	深月層	下部		Bryozoa. Parreysia sp. Cuneopsis sp. Bellamya sp. Corbicula sp. Lamprotula spp. 炭質頁岩の薄層あり 約 70cm の特徴ある凝灰質砂岩 Pisolite (豆石) 炭質頁岩とこあり 凝灰岩角礫凝灰岩 (安山岩) 小島崎凝灰角礫岩層		
		上部	190	Lithophaga sp. (岳下神崎鼻) 凝灰岩, 砂岩, 頁岩互層 3m ± 角礫凝灰岩 Pisolite を有する凝灰岩	大屋	
	大屋層	下部	110	Bellamya kosasana (UF. II) 密集帯 4 ~ 6 枚 凝灰岩, 頁岩, 砂岩互層 Lamprotula sp. 1 ~ 2M 凝灰質礫岩	野島本ヶ浦 西北海岸	
		加勢層	90+	含かき介化石粗粒砂岩 Ostrea sp. Pitar sp. 前加勢黒色頁岩層 Cyclammina sp. Yoldia sp. 礫質砂岩 (緑色岩片入り) Balanus sp. Chlamys sp.	加勢	
	福井層	上部	70-	二枚物 小蛇の目凝灰岩 本ヶ浦凝灰岩層 灰白塊状粗粒砂岩 局部的不整合	歌ヶ浦	福井層
		下部	100-	上岩石炭 Ostrea sp. "Cerithium" n.sp. Corbicula sp. "Phaxas" n.sp. 大蛇の目角礫凝灰岩 (豆石) 歌ヶ浦凝灰角礫岩層	焼島	
	世知原層	世知原層	120 ±	砂礫層 (隔物層) Ostrea sp. "Phaxas" n.sp. 含炭互層 第二鱗状 Corbicula hizenensis UF. II	矢岳	世知原層
		上部	150 ±	鹿町三尺層 松浦三尺層 灰白色粗粒砂岩砂質頁岩互層 Ostrea sp. 4 ~ 5m 角礫凝灰岩 江里凝灰角礫岩層	矢岳	柚木層
		下部	160 ±	岩石二枚 七層層 Marled aequalifolia (GOEPPERT) OISHI & FUJIOKA 頁岩砂質頁岩互層 中粒 粗粒砂岩層 約 70cm の特徴ある凝灰質粗粒砂岩 (方解石入り)	江里炭鉱	
		中里層	100 ~ 140	柚木三枚層 (バンド山層) "Phaxas" n.sp. 池野炭礦柚木 Brachyodus japonicus MATSUMOTO (三枚層より)	江里炭鉱	中里層
中新世前期	相浦層	上部	180	大瀬五尺層 眞申第三化石帯 川釣層 主として砂岩よりなり泥岩凝灰岩を従 眞申第二化石帯 Vicaryella sp. とし細礫岩を含む 眞申第一化石帯 Ostrea sp. Nassa sp. Glycymeris sp.	禪仏峠南 (佐々炭鉱)	相浦層
		中部	410	モエズ層 灰白色 ~ 黄灰色中粒砂岩を主体とし泥岩凝灰 砂管 泥岩を従とする角礫凝灰岩 新田四尺層 Nelumbo nipponica ENDO Glycymeris sp. Balanus sp. Yoldia sp. Venericardid sp. 海緑石粒 を含む Corbicula sp. (水田炭礦) 相浦三枚	高崎山 南方海岸 佐世保市西 方一鹿子前	
		下部		新田五尺層 殆ど灰白色 ~ 黄灰色塊状砂岩僅に泥岩凝灰 岩を挟む		
漸新世後期	古川層 (煙津頁岩層) 黒石層 (煙津砂岩層) みかえり橋		170	上部は黒色泥岩を主とする Yoldia sp. 中部は偽層の発達が著しい中粒砂岩 下部は泥岩細粒砂岩の薄互層	古川	黒石
			155	主として暗灰色淤泥岩玉葱状構造の発達顕著である海 棲介化石うに等を産する. Cyclammina sp. Glycymeris cisshuensis MAKIYAMA Chlamys ashiyaensis NAGAO Crassatellites yabei NAGAO		
			75+			

第 12 図 地質柱状模式図 (長浜・松井 1958)



第 13 図 九十九島の地質図

旧国土庁『表層地質図』改変

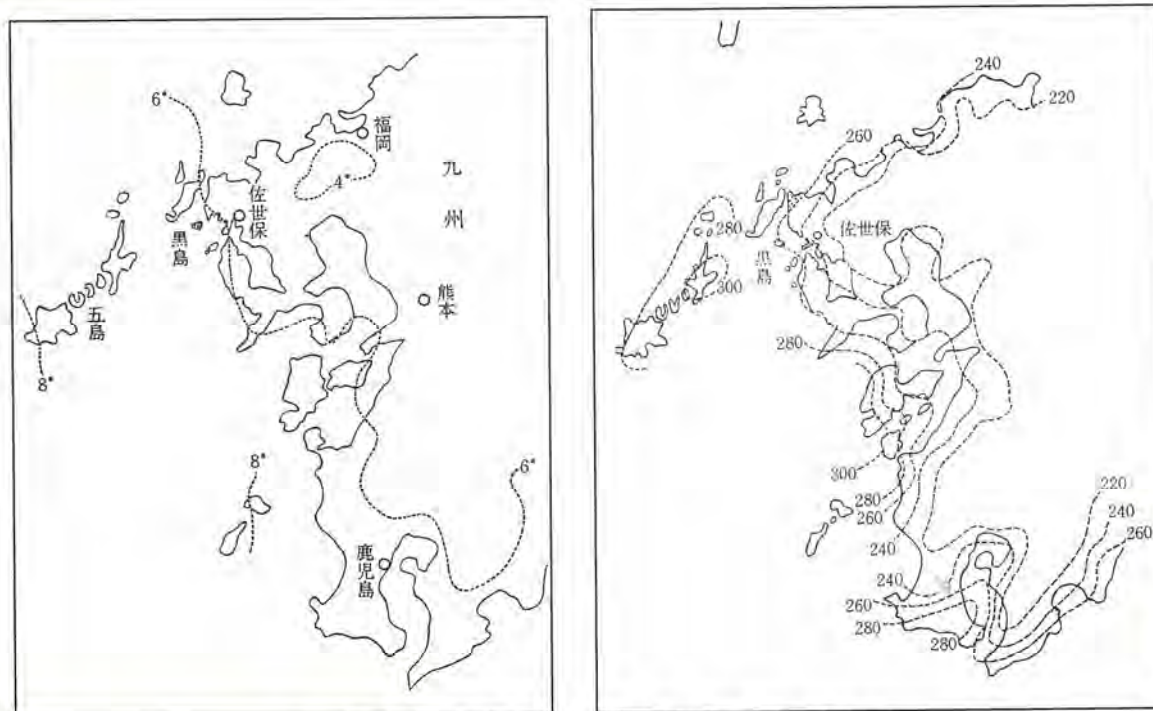
第 3 項 九十九島の気象、植生

第 2 章第 1 節第 2 項で述べたように、佐世保地方は西海型気候区に属している。したがって、九十九島も大まかな傾向は本土部分と大差はない。しかし、沖合いを流れる対馬暖流の影響により、海洋・海岸部は本土よりもやや温暖な傾向にある。特に、黒島、高島では最寒月でも最低気温が 6℃を下回る日が少なく、霜が下りる日も本土に比べて少ない(第 14 図)。

このように九十九島は冬に温暖といわれる西海型気候区の中でも特に温暖な地域となっており、そのことが植生にも影響を与えている。すなわち、南方系植物や九十九島を分布の北限とする植物が多く生育している。その代表的なものを以下に列挙する。なお末尾に*を付けたものは分布北限を示している。

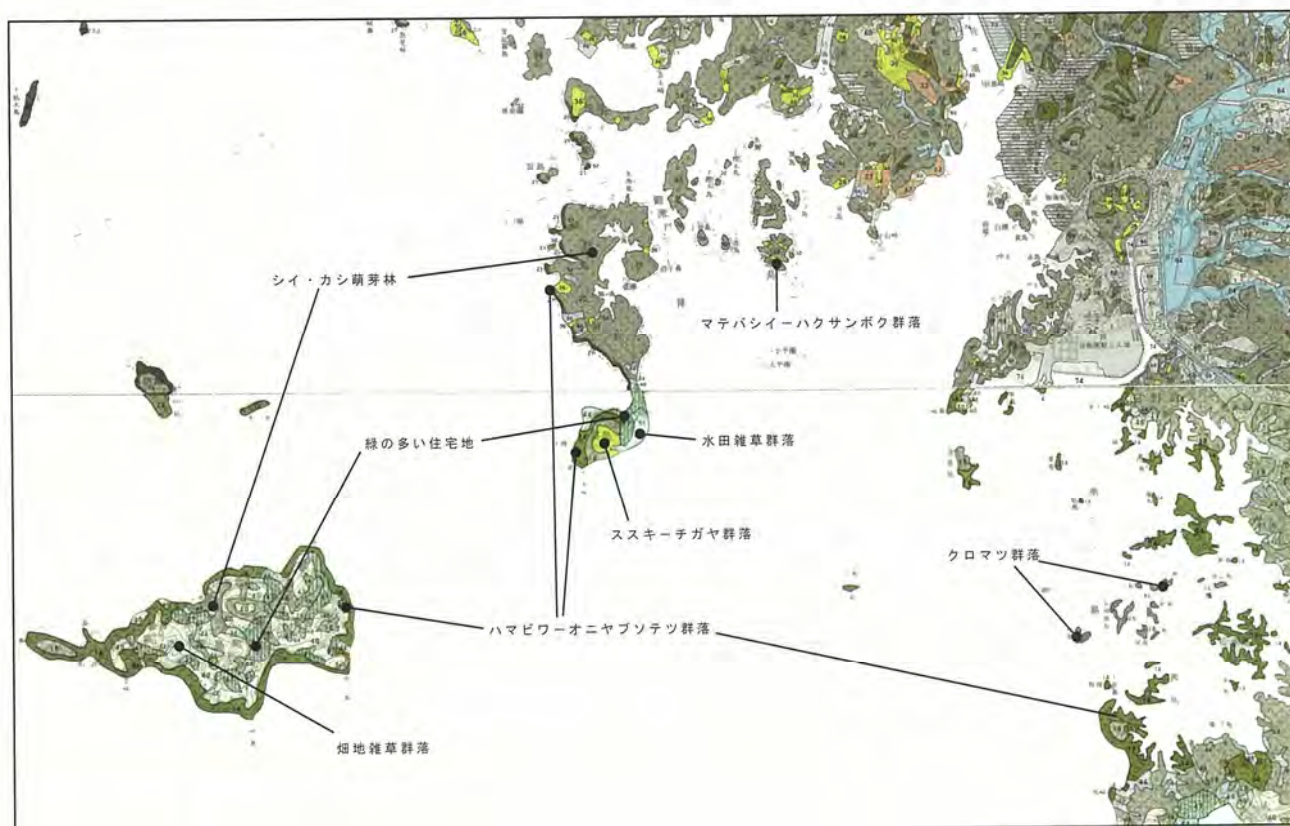
- ・ミヤコジマツヅラフジ *Paracyclea insularis* (Makino) Kudo et Yamamoto(ツヅラフジ科)
- ・アコウ *Ficus superba* Miq. var. *japonica* Miq.(クワ科)
- ・タマシダ *Nephrolepis cordifolia* (L.) Presl(ウラボシ科)
- ・モクダチバナ *Ardisia sieboldii* Miq.(ツルシダ科)
- ・サツマサンキライ *Smilax bracteata* Presl(ユリ科)*
- ・キイレツチトリモチ *Balanophora tobiracola* Makino(ツチトリモチ科)*
- ・トビカズラ *Mucuna sempervirens* Hemsly(マメ科)*

このうち、特筆すべきものがトビカズラである。平成 12 年(2000)に高島に隣接したトコイ島で確認されたもので、国内で 2 例目の確認となった。



第 14 図 1 月平均気温(左)と無霜期間日数

神戸大学経済経営研究所『黒島～出稼ぎと移住の島～』より



第 15 図 九十九島の現存植生図

旧環境庁『現存植生図』改変

九十九島の植生全般を見渡してみると、やはり佐々川河口により南北に分けることができる。これは先に述べた九十九島を構成している地質と地形の違いが大きく影響している。

なだらかな地形で十分な表土のある北九十九島では、スダジイ・アラカシなどの高木、モチノキ・ヤブツバキなどの亜高木、ヒサカキ・ネズミモチなどの低木といった常緑広葉樹に加えて、ヤマザクラ・アカメガシワなどの落葉広葉樹が混ざるといって本土とほとんど変わらない植物相が見られる。

一方、砂岩の急な崖地が多く、表土の薄い南九十九島では、クロマツ・ヒメミツバツツジといった植物が崖地に生育し、島の平坦部や比較的大きい島にはスダジイ・アラカシ・ヤマザクラといった高木～亜高木が多い。小さい島ではクロマツが目立つため、クロマツが優占種と思われがちだが、実際はシャリンバイ・トベラなどの低木が優占種となる。

このほかの特徴としては、北九十九島にほとんどないタキユリやカノコユリが南九十九島では大半の島で見られる、というように南九十九島にあって、北九十九島にない、あるいはその逆の植物もあるということが挙げられる。これも地質と地形の違いに影響されたものであろう。また、帰化植物が非常に少ないことも特徴として挙げられる。かつて人家や作業小屋があったところを中心にヨウシュヤマゴボウ・セイタカアワダチソウ・アメリカセンダングサなど十数種類が確認されているに過ぎない。これは九十九島の自然が良く保全されていることを示している。



ミヤコジマツツラフジ



アコウ



タマシダ



モクタチバナ



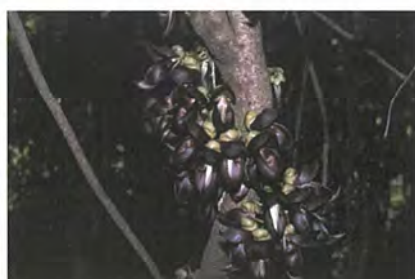
サツマサンキライ



キイレツチトリモチ



ハマジンチョウ



トビカズラ



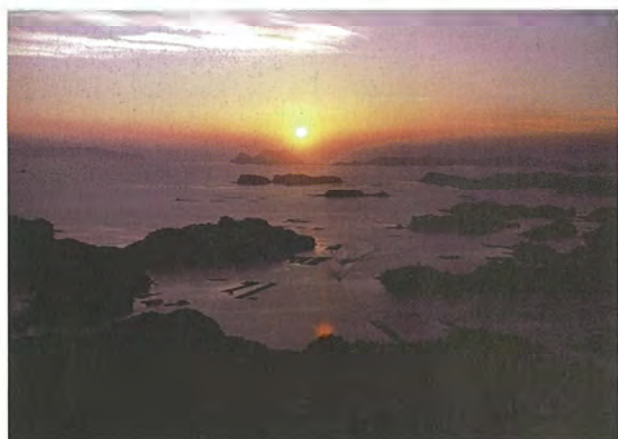
カノコユリ

第4項 観光地としての九十九島

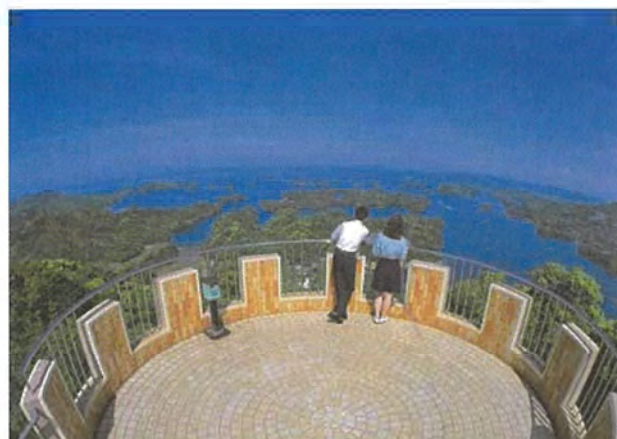
九十九島は古くから景勝地として知られており、大正時代には九十九島を一望できる弓張岳の鶴渡越から相浦の母ヶ浦までを結ぶ遊歩道「九十九島海遊道」が整備され、昭和2年(1927)には日本百景海岸の部にも選ばれるなど、観光資源として活用を図る動きもあった。しかし、昭和期に入り、国際情勢が緊張を増すと、要塞地帯に指定されていた鶴渡越への立ち入りは禁止され、九十九島の景観は一般市民の目に触れにくくなってしまった。

戦後、佐世保市は軍港から商港・観光都市への転換を図ることになったが、その過程において九十九島の景観に改めて注目した当時の佐世保市長 中田正輔(1884～1960)の主導により、九十九島地区、平戸生月地区、五島列島を含む海域の国立公園指定を目指す運動が起こされた。そして、昭和30年(1955)にリアス式海岸と、大小400にも及ぶ外洋性多島海景観を特徴とする西海国立公園が誕生し、200以上の島がある九十九島はそのほぼ全域が西海国立公園に指定された。しかし、居住地は極力範囲外とされたため高島集落が範囲外となり、森林を薪炭用に伐採することが盛んだった黒島全域が範囲外となった。なお浮瀬も範囲外となったが、その理由については不明である。

西海国立公園指定後、佐世保市では九十九島の観光開発を進め、水族館や展望所、遊覧船の就航など佐世保市を代表する観光地となっている。



石岳展望台からの夕景



展海峰



水族館「海きらら」



九十九島遊覧船「パールクイーン」